

2025年度

《第1回 iP class 選抜入試(東大専科)》

国語

時間50分，100点満点

受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入してください。
2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。
記入方法を誤ると得点になりません。
3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも回収します。

郁文館中学校

【一】次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～⑩の傍線部のカタカナは漢字に改め、漢字はその読みを答えなさい。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| ① 事件の詳細をテキカクに説明する。 | ② 怪我のチリヨウに時間を要する。 |
| ③ 自己ショウカイは苦手である。 | ④ 家の鍵をフンシツしてしまった。 |
| ⑤ 飛行機をソウジュウする。 | ⑥ 寺の境内を散策する。 |
| ⑦ 寺院を建立する。 | ⑧ 借金をすべて相殺する。 |
| ⑨ 政治家が全国に遊説に出向く。 | ⑩ 現金出納帳に残高を記録する。 |

問二 A～Eの（ ）に入る言葉として適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|-------------------------|-----|-----|-----|-----|
| ① 彼には（ A ）の打ちどころがない | ア 非 | イ 火 | ウ 手 | エ 釘 |
| ② 彼女は（ B ）に衣着せぬ物言いをする人だ | ア 口 | イ 肩 | ウ 齒 | エ 腰 |
| ③ 井の中の（ C ）大海を知らず | ア 魚 | イ 鯉 | ウ 虫 | エ 蛙 |
| ④ （ D ）事千里を走る | ア 悪 | イ 善 | ウ 馬 | エ 火 |
| ⑤ 人間万事塞翁が（ E ） | ア 幸 | イ 悪 | ウ 馬 | エ 福 |

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

二〇一八年一月から毎日日記をインターネット上に公開している。この日記を紙に印刷して、現在に至るまでに商業で一冊、自主制作で三冊発表までしている。僕はひとまず日記を公開し、販売さえする個人である。そのくせ僕は近年の日記ひいては随筆まわりの読書熱に対してどこか（ ）である。読み手としての日記への不信と、書き手としての日記の使用。この一見矛盾するような事態をへつちやらの顔で放置できてしまっているのはなぜだろうか。個人的な理路を解きほぐしていく中で、エッセイという茫漠とした文芸ジャンルのぐるりを素描できればいいなと思っている。

① 日記や随筆、エッセイという言葉は僕はふだんあまり区別しないで使っている。後述するがとくに日本語文化圏においては物語も評論も随筆もすべて日記から派生していったものであると考えているからだ。もちろんすべての文芸の起源は日記であるとまでぶち上げるつもりはない。日記は一面であり、もう一面には歌があるのだが、この注¹と太話は今度にしよう。ひとまず日記と随筆の話である。これらは一括して次のようなものと捉えてもいいと思う。――② 書き手と作中主体とを同一視することを自明の前提として読むような文章形態。

さて、僕が違和を感じているのは、その良し悪しの判断基準だ。「ほんとうのこと」、「嘘がない」、「ありのまま」――随筆や日記を評価する際、このような言葉が肯定的な文脈で使用されることが多い。これは随筆や日記に限らないようにさえ思う。正直な人が好き、みたいな人物評から、魂を削って作っている、みたいな創作全般へのロマンチックな幻想まで、③ 素材をそのまま出した方がいいという価値判断は僕たちの生活の場にありふれている。僕は、これが好きじゃないのだ。

九〇年代生まれの僕が小学生の頃だ。テレビでバカという役割を引き受けたタレントたちが珍妙な解答を連発するクイズ番組を見ていたとき、珍しくその時間に家にいた父親が苦々しく溢した言葉を覚えていた。

テレビっていうのはすごい人がすごいことをして見せる場所で、こんなズブの素人が出ていいものではないのではないか……

共感ができて、親しみが持てる、そういう素人っぽさを褒めそやして増長させる雰囲気への

異議申し立てであつたと思う。幼い僕もべつにその番組が好きではなかったので素直に、そうか、と思つたのではなかったか。当時テレビは權威であり、權威というのはいさるべき優れた能力に応じて付与されるものであつてほしい。そんな気分がまだありえたのだから、すでに当時からして時代錯誤であつたのか、そこまではわからない。

さて、日本という文化圏はとにかく素人に甘い、なんでもない一個人が、飾らない「ありのまま」の姿をカメラの前で曝け出すことにいまだにはしゃいでしまうようなところがある。ある対象をそのまま書くということの^{注2}称揚はこうした素人好きと^{注3}同根なのではないかと疑っている。とにかく全部そのままぶちまけること。それでプレゼンスを高めて階級上昇を達成すること。そこには^④アンダークラスから身一つでのし上がるというヒップホップ的な価値観との近似が見出せるかもしれない。無産階級のやりくりとしての日記や随筆というのもこの延長線上に置けるだろうか。しかし文筆一本で食っていけるような状況は今この土地にはないではないか。あぶく銭のために自らをなるべくそのままに曝け出そうと努めること、その割に合わないがまず何より気になる。暴露系の書き手や表現者は、多くの場合精神の不調に帰結する。目先の小銭のために長期的に心身の健康を損なうような高いリスクを取ることはなるべくよしたほうがいい。これは書き手本人の意思決定を責める意図は断じてない。手ぶらの相手に対して、とにかく全部脱いでしまえば耳目を集めて成功できるかもしれないよと唆しておいて、てきとうに楽しんだあとは誰も責任をとらないこの社会の構造がなんとも嫌だなあと感じていたという話だ。プロフェッショナルな芸への敬意がなく、自分たちにもできそうな素人芸を次から次へと使い捨てるような風潮。僕はこの幼稚さはとても悪いものだと思える。

日記や随筆のように書き手と作中主体が等号で結ばれがちなテキストが読み手に喚起する欲望というのは、^{注4}窃視的な性格を帯びずにはいないだろう。現代において随筆や日記の持つ問題とは、書き手が生活や人格を素朴に言語化しているという過程のもと、読み手の覗き見への欲望に奉仕するという構図にあるような気がする。芸の巧拙よりも演者本人への野次馬的好奇心の満足が優位に置かれるような構造。とってもやな感じだ。

私生活を欲望の対象として流通させるというのはどこまでも資本主義の論理に回収されていくだけである。これは人物や企業の過去の言動に不適切なものがあつた場合、不買運動を起こすという近年の^{注5}キャンセルカルチャー的なものとの関係も気になるところだ。作品と人格があまりにも近接し、いつのまにか僕たちは作品ではなく人格を購入しているかのような錯覚を素朴に受け入れてしまつてはいないだろうか。

そもその話として、素材をなるべくそのままに記述するという考えそのものにすでに^{注6}欺瞞を感じ取れる。ここには言葉というものの道具性への鈍感がある。目の前の事物をそのままに書き尽くすことなどできない。言葉と対象は別物だから当然だ。ほんとうの意味で嘘なくありのままに記述しようとするならば、早々に^⑤言葉の物質性を前にその不可能を思い知るだろう。事物の、なんとも言えないあの感じを文字の配置で再現しようと格闘すれば、自ずと文章はゴテゴテしたり、難解になっていく。しかしそのような、言語化不可能な実感の近似値を記述によって制作しようという無茶な試みの成果——レトリックは、「ありのまま」感を評価する日記や随筆の現場では「嘘くさい」と敬遠されてしまうのではないか。随筆に対して「これは本当だ」と感じる時、それはせいぜい読みやすいということではないことが多い。要は余計な装飾なしに、淡々と事実を記述してくれているというような錯覚を覚えているのだ。読みやすくて、何が書かれているかとする染み入ってくるようなだなあ、という読み心地は、事物そのものへの接近を意味しない。単純にあらはじめ予想できたり知っていたことから大きく逸脱しない文字列が書かれているというだけのことだ。^⑥リーダービリティへの盲目的な信頼と、それにともなう文飾の執行。これはまた、この数十年で中流階級が消滅していく状況と相関関係にあるかもしれない。貧しい状況では貧しいテキストしか生産されないのだろうか。僕はこれに否と言いたい。

言葉がコミュニケーションの道具にしかないという事態がどんどん進行しているように思えることが僕は何よりおそろしい。SNSでの投稿でも、商業出版されるエッセイでも良いのだが、そこで数を稼げる言葉とは、結局は流通しやすい言葉でしかない。流通しやすい文章を書くように自身を調律すること、これは社会通念に合致するように自らを企画化していく行為で

ある。どれだけ表面上の多様性が実現されたとしても、その多様な価値を測定する尺度がただ一つ流通可能性という企画しかないのであれば、本質的には世界は一面的なものにしかなり得ない。そのような読み書きは、言葉を貧しくしていく作業である。言葉が貨幣としてしか機能しなくなる。個人の生活の実態により近い混乱した言葉は、そもそも読解が困難だから誰も拡散しようと思わない。^⑦わかりやすく整えられたケアの言葉はメンテナンスの言葉に、アジェンションはマニュアルに、簡単に転化してしまう。そうなると個人は、混乱や矛盾含みの生身の個人としてケアされるのではなく、歯車やAIの代替物として絶え間ない仕様変更に翻弄されることしかできないのではないか。

伝わることだけを目的とした、バカみたいに単純な言葉だけを使用していると、ある種の人間不信に陥る。資本主義社会は、言語の複雑さを最小化し、単一的なものの見方を促進するような構造をもっている。一方で言葉が豊かになるとは、世界の実相である混沌に近づいていくということだ。多義的で、誤読の可能性に広くひらかれているということだ。言葉の豊かさは、この社会が志向する（

II

）貨幣の貧しさとはつきり対立している。

（中略）

言葉はただの道具で、あなたの代弁者ではない。私の内面を映す鏡ではない。書くとはつねにこれは自分ではないと言語との距離を思い知る行為である。個人が個人の固有性を素材としつつも、文法や語という他者を他人と共用することで誰かと共同しうる場をつくる。言語運用を共同の演技の場を構築するための使用としてとらえる。僕はおそらく、日記をそのようなものとして扱いたいのだろう。誰かとの共同を志向するからには、それは公開されなければならない。読み手としての日記への不信と、書き手としての日記の使用。この一見矛盾するような事態を僕はわりあい平気で放置していると冒頭に書いた。ここまで書いてきて分かったが、僕ははなから両者を矛盾するものとは捉えていないようだ。際限なく自己を市場価値に変換するような風潮に抗うための手段のひとつとして、僕は日記を使用している。画一的な貨幣の論理とはべつのところ

に、べつの形で共同の場をつくりだす行為としての日記。とはいえこの発想にも問題はある。共同体の性格として、どうしたって排他性がある。うちとよそを分けてしまう。でもまあそれはある程度はいいんじゃないかと思っている。みんなと仲良くするというのは無理だ。興味が無い人は放っておいてくれたらいい。ただか日記だ。そんなに立派なものでもすごいものでもない。きっぱりと友と敵を分けて、陣取り合戦を煽るようなことはしない。適度に大したことなさを保ち、だから毎日書く。日々違う誰かを自宅に招き入れるようにして、合う人はくつろげて、合わない人は遠慮なくツツコミを入れたり立ち去ったりできるような場所をつくるようにして書く。そういうものはバズらない。売れに売れることもない。規模を求めずそこそこで書き続けるといのは、日記や随筆が、^{注7}独我論に閉じこもり、自らの希少価値を市場に訴えながら、神の見えざる手に己を委ねきってしまうような危険を回避する一つの戦術でもありえる。

（柿内正午『エッセイという演技』）

注1 与太話…でたらめな話。

注2 称場…ほめたたえること。

注3 同根…根が同じであること。

注4 窃視的…見ることが許されていないものを、ひそかにのぞき見ること。

注5 キャンセルカルチャー…「容認されない言動を行った」と見なされた個人が「社会正義」を理由に、法律に基づかない形で排斥・追放されたり解雇されたりする文化的現象。

注6 欺瞞…あざむくこと。だますこと。

注7 独我論…世界に存在するのは自分だけという考え。

問一 傍線部①「日記や随筆、エッセイという言葉を僕はふだんあまり区別しないで使っている」について、筆者の述べる主旨として最も適当なものを次から選り記号で答えなさい。

- ア 文芸作品における主人公の心理描写に関する筆者の考察
- イ 芸術的な創造性と商業的な成功の関係性に対する筆者の見解
- ウ 文芸の分類の仕方に対する筆者のスタンス
- エ 書き手の創作意図と読み手の理解の相関関係についての筆者の論考
- オ 現実と理想化された創作の姿勢に対する筆者の批判的態度

問二 傍線部②「書き手と作中主体とを同一視することを自明の前提として読むような文章形態」には、どのような特性がありますか。本文の内容を踏まえ、最も適当なものを次から選り記号で答えなさい。

- ア 視き見をしているような感覚を与える特性
- イ 書き手と作中主体とを同一視させる特性
- ウ 多様な表現の可能性を狭める特性
- エ 商業主義的な側面を阻む特性
- オ 多様な価値観を認めることを容認する特性

問三 傍線部③「素材をそのままお出しした方がよい」とは、どのようなことを言い表していますか。本文の内容を踏まえ、最も適当なものを次から選り記号で答えなさい。

- ア 面白い作品が必ずしも売れるわけではないということ
- イ 登場人物の気持ちを想像して書くこと
- ウ 作品をたくさんの人に見てもらいたいということ
- エ 比喩などを使って美しく表現すること
- オ 本来の姿を表現することがこのまじいということ

問四 空欄（Ⅰ）（Ⅱ）を埋めるのにふさわしい言葉を、本文の内容を踏まえ、最も適当なものを次から選り記号で答えなさい。

- Ⅰ..
 - ア 観念的
 - イ 心情的
 - ウ 厭世的
 - エ 懐疑的
 - オ 意欲的
- Ⅱ..
 - ア 価値の可変的な
 - イ 単純で一元的な
 - ウ 不均衡な価値の
 - エ 雑多で主観的な
 - オ 普遍的で多様な

問五 傍線部④「アンダークラスから身一つでのし上がるというヒップホップ的な価値観」とはどのような価値観ですか。本文の内容を踏まえ、最も適当なものを次から選り記号で答えなさい。

- ア 既存の社会構造や権威への反抗を原動力とし、自己表現を通じて成功を目指す価値観
- イ 経済的な成功を第一目標とし、そのために手段を選ばず、自己犠牲も厭わない価値観
- ウ 才能や努力よりも運やチャンスを重視し、短期間での成功を追い求める価値観
- エ 貧困や差別といった逆境を乗り越え、社会的地位向上を目指す価値観
- オ 自己の才能や魅力を最大限に表現し、大衆からの支持を獲得することを目指す価値観

問六 傍線部⑤「言葉の物質性」と、ほぼ同じ意味に用いられている語を、本文の内容を踏まえ、最も適当なものを次から選り記号で答えなさい。

- ア 全体性
- イ 立体性
- ウ 客体性
- エ 主体性
- オ 一体性

問七 傍線部⑥「リーダービリティへの盲目的な信頼」とありますが、これはどのようなことですか。解答欄の冒頭の言葉に続くように本文中の言葉を用い、三十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑦「わかりやすく整えられたケアの言葉はメンテナンスの言葉に、アジテーションはマニュアルに、簡単に転化してしまう」とありますが、どのように転化するのでしょうか。本文中から十字以内で抜き出しなさい。

問九 本文中の筆者は、どのような観点から日記や随筆を評価していますか。合致する選択肢に○を、合致しない選択肢には×を、解答欄に記入しなさい。

- ア 日記や随筆の執筆は個人の表現を妨げるものだ と評価している
- イ 書き手と作中主体の同一視は重要でないと評価している
- ウ 混乱した言葉は流通可能性が低いと評価している
- エ 現代の言語使用は資本主義の影響を受けていると評価している
- オ 読み手の欲望と書き手の意図は一致しない場合があると評価している

【三】次の文章を読んで、後の問に答えよ。

服飾デザイナー瀬尾水樹は、四十五歳にして突然自社が服飾業から撤退することを知られ途方に暮れている中、同級生から恩師の入院の知らせ連絡が入り、連絡のつかない幼なじみの信也の連絡先が不明な中、その弟悠人の連絡先がわかり、弟悠人と再会し、信也が競輪学校に入ったことを知らされた。

「水樹ちゃん、ぼくって昔から変わっていたでしょう？」

「え？」

「ぼくには生まれつきの脳の機能障害があるんです。大人になってわかったことですが、ぼくにはその機能障害があつて、だからこれまで集団の中で生きるのが難しかったのだそうです。正直……ほっとしました、それを知つて。兄も専門医からその話を聞いた時、長い苦しみから抜け出したような顔をしていました」

知的な能力には問題がなくても、人づきあいがどうしても苦手な人がいる……それが自分だったのだ。それは本人のせいでもなく、生まれ持った資質なのに、自分がまだ幼かった時代は教師にもそういう性質の子供たちに関する知識がなかった。三十歳を過ぎた頃になって、発達障害という言葉が聞かれるようになり、それはひよつとしたら自分自身のことではないかと思った。兄と二人で専門医を受診し、検査を受けた。医師から答えをもらった時は戸惑いよりもむしろ（A）のほうが大きかったのだと、悠人は深く頷くようにして告げた。

「悠ちゃんは今はどんな仕事をしているの？」

小さい頃の悠人を思い出しながら、水樹は訊いた。

いつ見てもひとりぼっちだった。同級生の男の子たちが遊んでいるのを、自分の姿が見つからないように離れた所から眺めていた。羨ましそうに……でも少し怯えて。本当は悠人が一番、友達と仲良くしたかったのだ。でもうまくできなかった。うまくやりたいのに、うまくやれない。怒らせるつもりも苛立たせるつもりもないのに、あいつはわけのわからないやつだと、周りが離れていつてしまう。彼を取り巻く大人たちも、悠人が人とうまくなじめないことを、彼自身の責任にして自分たちの役目を終わらせていた。水樹だってそうだったし、悠人の母でさえそうだった。信也だけが、弟を守り抜いた。

「産業技術、総合研究所、という所で働いています」

悠人は区切るようにゆっくりと答えた。一度聞いてもすぐには憶えられないような名称だった。「そのエネルギー技術部門で研究員をやっています。今は人工光合成の実用化の研究に携わっています」

「人工光合成？」

「はい。人工光合成が実現すれば、太陽光発電やバイオ燃料に続く新たなエネルギーとして利用できます。太陽光発電は効率も高く今は主流ですが、やっぱりコストが高いところに難点があるんです。バイオ燃料はトウモロコシのような生物が生産するエネルギーを利用するから、その変換効率の低さが問題です。人工光合成の技術は、太陽電池と生物の光合成のいいところを利用しようといったところなんです」

それまでたどたどしく話していた悠人の口調が急に流暢りゅうちやうなものになる。自分の好きなことを語る時に周りが見えなくなる一途な性格はいまでも変わらず、でもそんな特質を生かした仕事に就いたのだなとその話に聞き入った。どこへ行ってもみんなに軽くあしらわれ、いじめられ、いつも泣き出しそうな顔をしていた悠人が胸を張って自分の仕事について語っている。

「私、理系のことはまったくくんぶんかんぶんて悠ちゃんの説明はよくわからなかったけど、悠ちゃんが自分の好きなことを仕事にしているんだということは伝わったよ。頑張ってるのね」

水樹は胸の前で手を合わせ、音を出さずに拍手をした。幼い悠人が何か頑張って成功した時、いつもそうやって褒めていたのを思い出したからだ。

悠人はそんな水樹のことをじっと見ていたけれど、少し顔を曇らせて、

「ぼくがいたから兄は思うように生きられなかったんだと、大人になって気がつきました。上の兄の事故も、母が自分や兄に冷たくなったのも、自分がこんなふうだからだと、わかったんです。水樹ちゃんが遠くに行ったのも、ひよつとしたら自分のせいかもしれないと考えること……ありました」

と急に声のトーンを落とした。「この歌、憶えていますか？」

注1ドはどりよくのド、レはれんしゅうのレ。ミはみずきのミ、ファはファイトのファ、ソはあおいそら、ラはらっぱのラー。

周りに人がいないことを確かめた後、悠人は小さな声で歌い出す。水樹は首を傾げてそんな彼の口元を見ている。

「水樹ちゃんがいなくなってから、①ぼくにはミの音がなくなりました。ミは大切な音でした。楽しくやっていてもふとミの音が抜けていることに気づいてそこで止まってしまふ。水樹ちゃんのないぼくの生活はそんな感じでした」

悠人はかすれた声でそう呟くと、すいません、久しぶりに会ったのにこんなことを話して、と頭を下げる。水樹は、自分があの町を離れる時にどれくらい悠人のことを思いやったか考えてみた。ほとんど、何も、考えていなかった。残される人の気持ちなんて、自分が飛び出したい衝動に比べたらあまりにも小さいものだった。信也だけを抛り所に生きてきた十代の悠人だった。学校ではほとんど言葉を発さずに過ごしていた悠人だった。水樹を見かけると、全身で喜びながら駆け寄ってきて、途切れることなく話しかけてきた。水樹は悠人の孤独を知っていたはずなのに、いともたやすく別れてしまったのだ。

東京に一度行ったことがあるのだと、悠人は苦笑する。注2半田に移り住んだ年の冬に、兄弟で生まれて初めての新幹線に乗った。

水樹の通っている服飾専門学校を見つけて、入り口のすぐ近くまで行ったけれど、それ以上中に入ることはどうしてもできなかった。行き交う学生たちがあまりにもきらびやかで、別世界の人たちに思えて。

「お兄ちゃん、あの人、鳥人間コンテストに出てくる人みたいやな」

緊張してそんなことを口にしたのを憶えている。傍らの信也は、何も言い返さなかった。自分たちの着古したジャンパーを、通り過ぎていくみんなが見ているように感じた。水樹に会えたら、東京で一泊してドイツニーランドにも連れていってやると信也は約束してくれていたけれど、

②結局は新宿の喫茶店でスパゲッティを食べた後、夕方の新幹線で帰った。約束を守らなかった信也を責めることなどできなかった。

「水樹ちゃん。昔、大富豪というトランプの遊びしたのを覚えていますか？大富豪のルールで、プレイの前に大貧民が大富豪に一番強いカードを二枚差し出さなさいといけないうのがありましたよね。一番強いカードを二枚も渡したら、やっぱり大貧民は勝てないです。大貧民が大富豪に勝つには、よほど運が良くないと無理で。そんな感じでした。あの頃のぼくたちは、もと

もと良くない手札から、その中でもましなカードが容赦なく奪われていく——田川というのは、母の旧姓なんです。母の再婚でぼくたち兄弟はいったん古瀬という姓を名乗りました。でも、借金取りから逃れるため、もう一度姓を変えたんです。水樹ちゃんに会う勇気が出なかった兄の気持ち、ぼくにはわかるんです」

「全然知らなかった。会いに来てくれたなんて」

喉の奥が熱くなつてきて、水樹は両手で頬を抑え込むようにして俯く。水樹の通っていた学校には、授業が終わるとそのままネオン街に繰り出せるよう、鳥の羽を模倣したストールや、体の線に張り付くようなドレス姿で登校してくる学生たちが大勢いた。みんな誰よりも目立とうと、うずうずしていた。彼らの奇抜な装いは、悠人と信也の目に、どう映ったのか。

悠人が、今日会いに来てもらって本当にうれしかったと自分の手元にあった視線を、水樹の顔に向ける。もう昼休みが終わるから行かなくてはいけないという彼の言葉にも、水樹の思考は止まったままだ。

「兄は……」

悠人の声に慌てて顔を上げた。

「兄は今、試合の最中なんです。試合期間中は外部との接触を禁じられていて携帯もつながりません。だから水樹ちゃんから連絡をもらったこと、伝えられていないんです」

悠人がすまなそうに告げるので、水樹は「いいの、いいの」と首を振った。

「信也の連絡先、教えてもらっていいかな？」

水樹は心の中に用意してきた言葉を、悠人に伝える。緊張で声が上がった。悠人は嬉しそうに頷き、胸ポケットに入れてあった黒い手帳を開くと、

「今日は最終日だから会えますよ。夕方の五時三十五分からの出走なので、いまずぐ新幹線に乗れば間に合います」

と急かすように水樹の手を取る。

「注：向日町競輪場です。憶えてますよね？」

悠人の言葉の意味に気づき、水樹が驚いていると③眼鏡の奥の目が細くなった。強い願い事がある時に見せるその表情は見覚えのあるものだった。

「名古屋からだと京都まで一時間もかからないし。そうだ、これ渡しておきます」

と慌てた様子でジャンパーのポケットに手を入れると、封筒を取り出す。

「手紙？」

宛名に、瀬尾水樹と書いてある。郵便局の転居先不明のスタンプが封筒の右上に押してあった。

「兄が書いていた手紙、ぼくがずっと持っていました。もうずいぶん昔のものですけど」

封筒を裏返すと、森嶋信也と書いてある。懐かしい字で。

「これ私が前に住んでいたマンションの住所」

「届かなかったんです。勇気を出して書いただろうに、届かなかったから……」

ずっと水樹に連絡を取れないでいた兄が、やっと出した手紙だった。なのにその手紙は水樹の手に届くことなく戻ってきて。兄は戻ってきた手紙を、何も言わずにゴミ箱に捨てた。自分は兄に黙って手紙を拾い上げてずっと手元に置いていたのだという。封も開けられないまま捨てられるなんて、手紙が……兄の想いがあまりに不憫だから。

「やっと水樹ちゃんに届いた」

悠人は言うのと、そろそろ昼休みが終わる頃だと、立ち上がる。

「兄はきつと水樹ちゃんが自分のことを怒ってると思ってるんです」

「怒ってる？」

「水樹ちゃんとの約束を守らなかったから」

「そんなこと」

水樹が呟くと、悠人は頭を下げて行こうとする。

水樹は「会ってくれてありがとう」と彼の背中に向かって声をかけた。悠人は振り返り、ぎこちない仕草で手を振る。特徴ある歩き方は子供の頃そのままだ。月面を歩く宇宙飛行士のような、どこか空を踏む不器用なその歩き方で彼はここまで生きてきたのかと思い、その道程にどれほど

の苦難と努力があったかと思ひ、その背が見えなくなるまで見つめていた。

まだたつぷり時間はあるから、ちゃんと考えとき。大人はさ、あつという間に歳取った、つてよく言うやろ？でもそれは違うと思う。人は急に歳を取るわけやないんや。おれら子供はゆつくりと、歳を取っていくんやー。

注⁴ 正浩ちゃん言葉が蘇^{よみがえ}る。ドはどりよくのド、レはれんしゅうのレ……意味もはっきりとはわからないのに歌っていた悠人の澄んだ高い声。④最後のフレーズはオリジナルのままの、シはしあわせよ……さあ歌いましょう、だったことを思い出した。

く 藤岡陽子『手のひらの音符』く

注1 ドはどりよくのド、く…信也が悠人のために作った替え歌の部分。

注2 半田…愛知県にある地名。

注3 向日町競輪場…水樹の家族と悠人の家族が昔住んでいた団地近くの競輪場。

注4 正浩ちゃん…信也と悠人の兄。小学生の時に交通事故死した。

問一 (A) にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 絶望感 イ 安堵 ウ 脱力感 エ 悲哀

問二 文章中の波線部「怒らせるつもりく終わらせていた」とありますが、障害を持つ人に対する接し方として、次の左の文章も参考にしてあなたの意見を七十字以内で述べなさい。

全盲の木下路徳さんは、子どもの頃、視力が弱まるにつれて同級生がよそよそしくなっていた経験について語っています。

小学生の頃、木下さんは目の手術をして半年くらい学校を離れていました。その後学校に復帰しましたが、しばらくは弱視学級という別室でマンツーマンの授業を受けていました。

でもあるとき、音楽や給食の時間は、それまで通っていた通常クラスに帰ろうということになったそうです。それで、それまで一番仲のよかった友達が、弱視学級の教室に迎えに来てくれることになりました。もとのクラスに自然に戻るようという配慮だったのでしょうか。

ところがこのことが、小学生の木下さんに最初のショックを与える結果になってしまいました。「親友が来てくれたんだけど、『よお！』みたいな和気あいあいとした雰囲気にならなくて、『はい、じゃあ行きましょうか』というような事務的な感じで、何もしやべらず移動していったんですね。何これ、ぜんぜん楽しくないじゃんって(笑)」。その後も友達とは以前のような関係に戻れず、クラス替えでますます距離は遠のくばかり。「仲のよい友達を奪われた」という感じだったと言います。

推測するに、弱視学級の教室に迎えに来てくれた親友は、悪意からよそよそしくしたのではないと思います。むしろ、その反対に善意があったのではないのでしょうか。木下くんは目の手術をしたのだ、つまりいたり転んだりしないように気をつけなければいけない、危ないものがあつたら教えなければいけない、と緊張していたのではないのでしょうか。

私も同じ立場に立たされたら、きっとそのように接していたと思います。でも、このような意味で「大事にする」のは、友達と友達の関係ではありません。からかったり、けしかけたり、ときには突き飛ばしたり、小学生の男子同士なら自然にやりあうようなことが、善意が壁になって成立しなくなってしまった。「だんだん見えなくなってくると、みんながぼくのことを大事に扱うようになって、よそよそしい感じになって、とてもショックでした」。

く 伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』く

問三 傍線部①「ぼくにはミの音がなくなりました」とありますが、悠人が伝えたかったことを四十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部②「結局はく帰った」とありますが、なぜ信也は水樹に会わずに帰ってしまったのですか、その理由を本文の内容を踏まえ、四十字以内で説明しなさい。

問五 傍線部③「眼鏡の奥の目が細くなった」とありますが、悠人のどのような気持ちを表していますか、三十五字以内で説明しなさい。

問六 傍線部④の、最後の一文に込められた水樹の心情はどのようなものと考えられますか、百字以内で答えなさい。

令和七年度 郁文館中学校入試

受 験 番 号

氏 名

一

問 一

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

二

問 二

①

②

③

④

⑤

問 一

問 二

問 三

問 四

I

II

問 五

問 六

問 七

日記や随筆を、

問 八

三

問 一

問 二

問 三

問 四

問 五

問 六